

神の民に対する「神の怒り」 —イザヤ書 1-12 章における考察—

三好 明

はじめに

「神の怒り」というテーマが近代のキリスト教会の歴史において果たした役割は、決して小さなものではなかった。たとえば、ジョナサン・エドワーズの「怒れる神の御手の中にある罪人」という説教は、18 世紀における信仰の大覚醒を促した説教としてよく知られている¹。しかしながら、このテーマは日本のキリスト教会においてどのように受け止められてきたであろうか。「神の怒り」が記されている聖書の箇所があっても、あまり講壇から語られてこなかったのではないだろうか。「神の怒り」について考察することは、説教の務めを与えられた者にとって重要な課題であろうと思われる。本研究は、この無視されがちなテーマを、最初にその 20 世紀以降における研究史を紹介し、その後、そこにおいて欠けていると見られる点を考慮しつつ、イザヤ書 1-12 章を例に考察しようとするものである。

1. 研究史と問題の所在

旧約聖書における「神の怒り」について考察するときに、参照しなければならない 20 世紀における二つの重要な著作がある。その一つは、ルードルフ・オットーの『聖なるもの』であり、もう一つはアブラハム・ヘッシェルの『イスラエル預言者』である。

¹ ジョナサン・エドワーズ『説教 怒れる神の御手の中にある罪人』（飯島徹訳、CLC 出版、1991 年）

オットーは、キリスト教の神には合理的な述語で汲み尽くすことのできない「非合理的なもの」(das Irrationale)があることを主張し、そこから受ける非合理的な宗教的体験を、神的なものを表すラテン語のヌーメンに基づき「ヌミノーゼ」(das Numinose)と呼んだ。そして、このヌミノーゼを引き起こすものとして旧約聖書における「神の怒り」を挙げたのである。オットーは、「神の怒り」が「隠された自然力」のような「もともと道徳的な特性とは何の関係も持っていない」ものであるとし、旧約聖書の神「ヤハウェは『測り難く』また『勝手気まま』である」と断じた²。すなわち、オットーは旧約聖書における「神の怒り」を、人間には理解できない非合理的で恐るべきものと考えたのである。

これに対して、ユダヤ人の神学者アブラハム・ヘッセルは「神的熱情」(Divine Pathos)こそが預言者の神理解の中心であり³、「熱情は、本来的に非合理的なものであるどころか、預言者が情緒的かつ道義的に理解しうる一状態である」と主張した⁴。ヘッセルは、「神の怒り」を「隠された自然力」のようなものとするオットーの理解を「預言者的思惟をまったく歪めるもの」として退けて、「正義、すなわちミシュパートが神の怒りの尺度である。人間の残酷さの犠牲にされた人びとに対する神の同情が神の怒りの動因である」と述べた。ヘッセルによれば、「神の怒り」は「憐れみが再び姿を現わす機会を待っている」「幕間劇」のようなもので、「中断された愛」「引き止められた憐れみ」「身を隠した慈悲」である⁵。

このようにオットーとヘッセルは「神の怒り」をめぐるまったく異なる見解をもっていた。その後の旧約聖書学の展開を見れば、ヘッセルの方が圧倒的に強い影響力をもっていると言えるであろう⁶。ただし、ヘッセルは

² ルードルフ・オットー『聖なるもの』(華園聴磨訳、創元社、2005年)38頁

³ アブラハム・ヘッセル『イスラエル預言者』下(森泉弘次訳、教文館、1992年)15頁

⁴ ヘッセル、前掲書、21頁

⁵ ヘッセル、前掲書、117頁

⁶ ヘッセルが後の聖書神学、特にフレットハイムとブルグゲマンに及ぼした影響については、M. R. Schlimm, "Different Perspectives on Divine Pathos: An Examination of Hermeneutics in Biblical Theology," *CBQ* 69 (2007) 673-694 に詳しい。なお、オッ

「聖書における聖なるものは不気味なものの同義語ではない」というように⁷、オットーに対するアンティテーゼを主張するのであるが、「聖なるもの」すなわち神の「聖」が「神の怒り」にどのように関係しているかということについては説明していない。

1990年代以降、旧約聖書における「神の怒り」についての多くの専門研究が発表されるようになった⁸。まず、1992年にブルース・エドワード・バロイアンによる *Anger in the Old Testament* (旧約聖書における怒り) が出版された⁹。バロイアンは、旧約聖書全体にわたって387箇所の「神の怒り」のモチーフを抜き出し、それぞれについて共時的に、その動機、対象、結果、そして用いられているヘブル語を挙げて整理した。バロイアンによれば、「神の怒り」の理由は、第一に、人間が他の人間に対して過酷であることによって神の正義が傷つけられるからであり、第二に、神御自身に対する忠誠を求めることが正しいことであるからである¹⁰。バロイアンにおいても、神の「聖」と「神の怒り」の関係については、特に論じられていない。

通時的研究としては、1998年のカリ・ラトヴスによる *God, Anger, and Ideology: The Anger of God in Joshua and Judges in Relation to Deuteronomy and the*

トーの見解もある程度受容されてきたことを忘れてはならない。ルドルフ・キッテルの編纂した『新約聖書神学事典』の ὀργή (怒り) の項目において、ヨハンネス・フィヒトナーはオットーとパウル・フォルツを参照しつつ「神の怒り」の動機が「ヤハウェの思いもよらない力と『聖』」であることを肯定し、「神の怒りは支配への絶対的要求を主張し確立する聖なる神の攻撃である」と述べている。ただし、フィヒトナーは「神の怒り」が「ヤハウェの傷つけられた聖なる愛の表現として宣言されている」とも述べており、オットーの見解を受容しつつ修正しようとしたことがうかがわれる。Johannes Fichtner, "ὀργή, The Wrath of God," *TDNT* 5:402, 407-409.

⁷ ヘッセル、前掲書、21頁

⁸ 旧約聖書における「神の怒り」についての先行研究の概観は、拙稿「なぜ神は怒られるのか—これまでの研究と新たな研究の試み—」日本キリスト教会神学校『教会の神学』第23号、1-26頁を参照。なお、さらに包括的な研究史については、後述する Stefan H. Wälchli の *Gottes Zorn in den Psalmen* の序論の部分に詳しく記されている。

⁹ Bruce Edward Baloiian, *Anger in the Old Testament* (New York: Peter Lang, 1992).

¹⁰ *Ibid.*, 176-178.

Priestly Writings (神、怒り、イデオロギー —申命記と祭司文書との関連におけるヨシュア記と士師記における神の怒り—)¹¹、2006年のサマンサ・ジュエによる *Provocation and Punishment: The Anger of God in the Book of Jeremiah and Deuteronomistic Theology* (怒らせることと罰すること—エレミヤ書と申命記史家の神学における神の怒り—)¹²、2009年に第1版が、2011年に第2版が出版されたドイツの旧約学者イェルク・イェレミアスによる *Der Zorn Gottes im Alten Testament: Das biblische Israel zwischen Verwerfung und Erwählung* (旧約聖書における神の怒り—棄却と選びの間にある聖書のイスラエル—)がある¹³。これらの通時的研究によれば、ある一定の歴史的な文脈の中で「神の怒り」についての認識・記述がなされたという結論になっている。しかし、これらは「なぜ神の怒りが認識され記述されたか」という問いに対する答えではあるが、「なぜ神は怒られるか」という問いに対する答えではない。「なぜ神は怒られるか」という神学的な問いに答えるためには、現在私たちの前にある神の言葉としての聖書テキストが「神の怒り」について何を語っているかを共時的に読み取ることが求められるであろう。

「神の怒り」についての新しい研究として、2012年に出版されたステファン・H・ヴェルヘリによる *Gottes Zorn in den Psalmen: Eine Studie zur Rede vom Zorn Gottes in den Psalmen im Kontext des Alten Testaments und des Alten Orients* (詩篇における神の怒り—旧約聖書と古代オリエントの文脈における詩篇の神の怒りについての言説の研究—)を挙げる事ができる¹⁴。ヴェルヘリは、バロイアンの作った「神の怒り」のモチーフのリストに基づいて27の詩篇を選

び、それぞれについて「神の怒り」がどのような文脈において表されているかを研究した。その結果、敵に対する怒り、罪に対する罰としての怒り、理解することのできない怒りの三つの主な文脈があることを明らかにした¹⁵。そして、「神の怒り」と神の「愛」の関係については、「神の怒りは、世界に対する神の配慮の一部として真剣に取り組みなければならない。神が愛をもって世界に向かうとき、神は義において、怒りにおいて、そして恵みにおいてこのことをするのである」と結論している¹⁶。ヴェルヘリの研究は、かつてヘッセルが預言書について述べたことが詩篇においても当てはまることを実証したと言える。

このように、この四半世紀くらいに旧約聖書における「神の怒り」についての研究は次第に深められてきた。ただし、イザヤ書については未だ十分な専門研究がなされていないのが現状である。イザヤ書の「神の怒り」についての専門研究は、1993年にジェイソン・W・ロックが *Restoration Quarterly* に書いた短い論文以外に見当たらない¹⁷。また、筆者の限られた範囲ではあるが、イザヤ書の注解書や研究書を読んでみても、イザヤ書全体の主題として「神の怒り」に注目したものは少ない。その数少ない研究者の一人ジョン・N・オズワルトは1986年に出版された注解書の中で「イザヤにとって審判とは傷つけられた神の人格的な激しい怒りの作用でもある。イザヤにとって神は力ではなく、圧倒的に人格なのである。そして、神はその民に対して熱情をもって応答される」と述べている¹⁸。また、ジョン・ゴルディングイは2014年に出版されたイザヤ書の神学についての研究書の中で、「ヤハウエの怒りの力は人格的存在であることとするのである。人格の特徴の一つは、一定の範囲の感情を持っていることである。(中略)ヤハウエは怒るのであるが、それは本能的な信実 (faithfulness) と憐れみ (mercy) の表現としてではない。民に反対して行

¹¹ Kari Latvus, *God, Anger, and Ideology: The Anger of God in Joshua and Judges in Relation to Deuteronomy and the Priestly Writings* (JSOTSup 279; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1998).

¹² Samantha Joo, *Provocation and Punishment: The Anger of God in the Book of Jeremiah and Deuteronomistic Theology* (Berlin: Walter de Gruyter, 2006).

¹³ Jörg Jeremias, *Der Zorn Gottes im Alten Testament: Das biblische Israel zwischen Verwerfung und Erwählung*. 2. Aufl. (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2011).

¹⁴ Stefan H. Wälchli, *Gottes Zorn in den Psalmen: Eine Studie zur Rede vom Zorn Gottes in den Psalmen im Kontext des Alten Testaments und des Alten Orients*, *Orbis Biblicus et Orientalis* (Fribourg: Academic Press; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2012).

¹⁵ *Ibid.*, 146.

¹⁶ *Ibid.*, 149.

¹⁷ Jason W. Locke, "The Wrath of God in the Book of Isaiah," *Restoration Quarterly* 35 (1993): 221-233.

¹⁸ John N. Oswalt, *The Book of Isaiah, Chapters 1-39*, (NICOT; Grand Rapids: Eerdmans, 1986), 40.

為することはヤハウェにとって異質なことであるが、ヤハウェは必要ならばこの異質な行為をあえてなすことを引き受ける備えがあるのである」と述べている¹⁹。オズワルトの見解はヘッシエルに非常に近く、ゴルディンゲイの見解はヘッシエルの見解をやや修正したものであろう。しかし、この両者においても、神の「聖」と「神の怒り」がどのように関係しているかは論じられていない。イザヤの召命記事や「イスラエルの聖なる方」という称号に表現されているように、神の「聖」はイザヤ書の重要な主題である²⁰。イザヤ書において、神の「聖」と「神の怒り」がどのように関係しているかは残された研究課題であろう。すなわち、イザヤ書においては、非合理的ではない理解可能な仕方において神の「聖」が「神の怒り」に関係しているのではないかと、ということが考察の課題となるのである。本論者は、この問いに対する応答を聖書テキストを中心に試みるものであるが、「聖」をどう定義するかは難解な問題であり、その点での論考は未だ不十分であることを前以てお断りしたい。また、紙面の都合上、イザヤ書の一部とならざるを得ない。

まず、取り扱おうとするテキストについて述べておく。イザヤ書全体を1-12章、13-27章、28-35章、36-39章、40-55章、56-66章の六つの部分に分けるならば、1-12章はその最初の箇所である²¹。1-12章には「神の怒り」の用語が²²、5章8-25節、9章7-11節、同12-16節、同17-20節²³、10章

1-4節、同5-19節、同20-27節、12章1-6節の八つのペリコーペにおいて登場する。これらのうち、内容に共通性があり連続している9章7-11節、同12-16節、同17-20節、10章1-4節は、一つのまとまりとして扱うことができる。10章5-19節、同20-27節、同28-34節はアッシリアに対する審判を主たる内容とするので、本稿では取り上げない。また、12章1-6節は「神の怒り」の終わりを告げる救済預言であるので、本稿では取り上げない。なお、1章と6章は「神の怒り」に直接かかわる用語は現れない箇所であるが、イザヤ書全体の理解にとって重要であるので取り上げる。本稿では、1章、6章、5章8-25節、9章7節-10章4節のそれぞれにおいて「神の怒り」がどのように告知されているかを分析し、神の「聖」と「神の怒り」がどのように関係しているかを考察する。

2. イザヤ書1章における「神の怒り」

イザヤ書1-5章はイザヤ書全体の序にあたり、その中でエルサレムに対する審判と希望が交互に語られている²⁴。すなわち、1章2-31節には審判が、2章1-5節には希望が、2章6-22節と3章1節-4章1節には審判が、4章2-6節には希望が、5章1-30節には審判が語られている²⁵。神の審判と「神の怒り」には深いかかわりがある。イザヤ書1章においては「神の怒り」に直接かかわる用語は現れないが、民の背きが告発され民に対する神の審判が宣告されている。すなわち、民の背きは「子らはわたしが大きくし、育てた。しかし彼らはわたしに逆らった」²⁶（イザヤ1:2）と、親に対する子の背きとして描かれている。また、牛やろばは飼い主を知っているのに、「イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない」（イザヤ1:3）と、家畜にも劣る飼い主に対する忘恩としても描かれている。このような背きと忘恩の民に対する神の審判は、病と傷の比喻によって次のように語られている。「なぜあなたがたは背きを重ねて、

って表示するが、必要に応じて新改訳聖書の章節を付記する。

²⁴ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 55, 80.

²⁵ Barry G. Webb, *The Message of Isaiah* (BST; Leicester: InterVarsity Press, 1996), 41-58.

²⁶ 以下、聖書引用が私訳であることを明示しない場合は、新改訳聖書（第三版）によって引用する。私訳は新改訳聖書（第三版）を参照して作成した。

¹⁹ John Goldingay, *The Theology of the Book of Isaiah* (Downers Grove: InterVarsity Press, 2014), 55-56.

²⁰ 神の「聖」がイザヤ書の重要な主題であることについては、Otto Procksch, “ἅγιος, The History of the Term in the OT,” *TDNT* 1:92; Helmer Ringgren, “שׁוֹדֵק, OT Use,” *TDOT* 12: 535-536 を参照。

²¹ Barry G. Webb, “Zion in Transformation: A Literary Approach to Isaiah.” in *The Bible in Three Dimensions: Essays in Celebration of Forty Years of Biblical Studies in the University of Sheffield*, (JSOTSup 87; ed. D. J. A. Clines, S. E. Fowl, and S. E. Porter; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1990), 72-81.

²² 「神の怒り」の用語が直接的に登場する箇所は以下のとおりである。אָר (5:25 二回、9:11、16、20、10:4、5、10:25、12:1)、אָנָה (12:1)、נָעַם (10:5、25)、הָרָה (5:25)、עָרָה (9:18、10:6)

²³ 新改訳聖書では9章1節がヘブル語聖書の8章23節に対応しているため、9章の節がヘブル語聖書より1節ずつずれている。以下、章節はヘブル語聖書に従

なおも打たれようというのか。頭は残すところなく病にかかり、心もすっかり弱り果てている。足の裏から頭まで、健やかなところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてもらえない。」(イザヤ 1:5-6、私訳) 親に対する背きと飼い主に対する忘恩、その結果としてのいやされない病と傷、これらのイメージは、民の背きによって引き起こされた「神の怒り」の存在を示唆している。そして、「あなたがたの国は荒れ果てている。あなたがたの町々は火で焼かれ、畑は、あなたがたの前で、外国人が食い荒らし、外国人の破滅にも似て荒れ果てている」(イザヤ 1:7)とあるように、神の審判は具体的には外国による侵略によってなされる。すなわち、イザヤ書1章においてすでに「神の怒り」の原因のみならず、それが現実にとどのような仕方で表されるかということも示されているのである。

民の背きが具体的にどのようなものであったかということは、「神の怒り」の用語を含むテキストに即して述べることにしたい。ただし、あらかじめ注意しておきたいのは、民の背きの性格の問題である。1章2-5節において民の背きを表現するために四つの動詞と一つの名詞が用いられている。HALOT は用例の解説において、2節の פָּשַׁע のカル形には“to break with” (絶交する)、4節の עָזַב のカル形には“to forsake” (捨てる)、אָנָן のピエル形には“to treat disrespectfully” (軽蔑して扱う)と“discard” (捨てる)、זָוָה のニファル形には“to become estranged” (疎遠になる)、名詞 סָרָה には“obstinacy” (頑固さ)という翻訳を提案している。これらの翻訳は、ここで告発されているのが攻撃的な反抗というよりも正しい交わりの拒否というニュアンスをもつことを示している。

このような正しい交わりの拒否の根底にあったのは、4節にあるように民が「イスラエルの聖なる方」を侮ったということであった。民は「イスラエルの聖なる方」を聖とせずに侮ることによって「イスラエルの聖なる方」の怒りを引き起こした。神の「聖」はそれを侮る者に対して「神の怒り」として働くということが、イザヤ書の最初において序曲のように示されているのである。

3. イザヤ書6章における神の「聖」と「神の怒り」

イザヤ書6章は、イザヤ書における「神の怒り」が聖なるものとそれと異質

なものとの対峙に起因することを示唆する箇所である。イザヤは神殿において「高くあげられた王座に座しておられる主を見た。」(イザヤ 6:1)そして、セラフィムが「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満つ」(イザヤ 6:3)と呼びかわしているのを聞いた。この「聖なる」神との出会いによって、イザヤは自らの汚れを自覚させられた。

イザヤが直面した神の「聖」を、研究者たちは倫理的・道徳的な意味における「聖」として理解する²⁷。確かに、イザヤは自らのくちびるの汚れを自覚し、さらに自らの罪が贖われる経験をするのであるから、イザヤが直面した神の「聖」に倫理的・道徳的な意味があることは否定できない。しかし、旧約聖書における「聖」の基本概念がレビ記において提示されているとの仮定に立つならば、「倫理的・道徳的な意味」が、人間が想定するものを超えたものである可能性がある。ほとんどの研究者はイザヤの汚れの自覚を神の「聖」との対峙によるものと認めるが、「聖」や汚れについてのレビ記の律法に言及しようとはしない²⁸。この点は再検討されるべきであろう。レビ記19章2節には「イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、【主】であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない」とある。この箇所に基づくならば、イザヤは「聖なる」神と出会うことによって、「聖なる者とならなければならない」という主なる神の命令に直面したと言える。デイルマ

²⁷ たとえば、以下の文献を参照。Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 180; J. Alec Motyer, *The Prophecy of Isaiah: An Introduction and Commentary* (Downers Globe: InterVarsity Press, 1992), 77; John G. Gammie, *Holiness in Israel* (Minneapolis: Fortress, 1989), 83; Helmer Ringgren, “שָׁרָה, OT Use,” *TDOT* 12: 535-536.

²⁸ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 182-183; Motyer, *Isaiah*, 77; C. F. Keil and F. Delitzsch, *Commentary on the Old Testament in Ten Volumes, Isaiah*, vol. 7 (trans. by James Martin; Grand Rapids: Eerdmans, 1975), 195-196; John D. W. Watts, *Isaiah 1-33*, rev. ed. (WBC; Nashville: Thomas Nelson, 2005), 108; Brevard S. Childs, *Isaiah: A Commentary* (OTL; Louisville: Westminster John Knox, 2001), *Isaiah*, 55; Hans Wildberger, *Isaiah 1-12: A Commentary*, trans. by Thomas H. Trapp (Minneapolis: Augsburg Fortress, 1991), 232-233. ただし、鍋谷堯爾はイザヤ書6章5節について「〈汚れた〉ものは、すべて、神の御前から退けられる」とコメントして、レビ記11章44節、15章31節、18章28-30節、22章3節を挙げている。鍋谷堯爾『イザヤ書注解上1-23章』(いのちのことば社、2014年) 208頁

ンはイザヤ書の注解において「『聖』とは神の多くの属性の一つではなく、神の存在の本質を指す中心的な名称である」と述べている²⁹。「聖」が神の存在の本質を指すとすれば、それを定義することはきわめて困難であるが、「聖」の本質を「自己中心的性格のないこと」と理解することもできる³⁰。そうすると、このレビ記 19 章 2 節の命令は「もはや自己中心的な性格をもたない人間の心の状態」を命じているものとして理解される³¹。すなわち、「神の『聖』は人間の『聖』とは異なるけれども、それぞれは無私であることによって特徴づけられる」のである³²。

このような神の「聖」の理解は、なぜイザヤが「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる」（イザヤ 6:5）と告白したかをよく説明する。イザヤは自らと民の自己中心的な心を自覚させられ、それに対する「神の怒り」を感じたからこそこのように言ったのであろう。すなわち、イザヤは、民の自己中心性から来る高慢に対して「万軍の【主】である王」が怒っておられ、自分も怒りの対象である民の一員であると受け止めたからこそ、自分の滅びとくちびるの汚れを自覚した³³。民の高慢が神を怒らせることは、以下に取り上げる 5 章 8-25 節や 9 章 7 節-10 章 4 節における「神の怒り」についてのテキストからも明らかである³⁴。

自らのくちびるの汚れを自覚したイザヤを清めたのは、セラフィムが持って来た「祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭」（イザヤ 6:6）であった。セラフィムは「燃えさかる炭」をイザヤの唇に触れさせて、「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた」（イザヤ 6:7）と宣言した。イザヤのくちびるに触れた「燃えさかる炭」

は何を象徴しているのでしょうか。このことについても、レビ記に基づいて考えることができる。「燃えさかる炭」はいけにえをささげる祭壇の上から取られたのであろう³⁵。レビ記 6 章 9 節は「全焼のいけにえそのものは、一晚中朝まで、祭壇の上の炉床にあるようにし、祭壇の火はそこで燃え続けさせなければならぬ」と定めている。全焼のいけにえには罪を贖う意味がある。すなわち、レビ記 1 章 4 節で「その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである」と説明されている。また、罪のためのいけにえの脂肪も全焼のいけにえの祭壇で燃やされ、罪の贖いとなる（レビ 4:26、31、35）。イザヤの罪が贖われたのは、イザヤのくちびるに触れた炭火が罪を贖ういけにえをささげる祭壇から取られたからである。近年、しばしば「贖う」と訳されてきた **כָּפַר** というピエル形の動詞（イザヤ書 6 章 7 節においては **תִּכַּפֵּר** というプアル形で登場する）が、「贖い」を超えて「神の怒りの宥め」の意味をもつことが提唱されている³⁶。その仮定に立てば、「燃えさかる炭」は「神の怒りの宥め」を行うものと言うことができる³⁷。罪を贖われたイザヤには「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように」（イザヤ 6:10）という使命が託された。主なる神がイザヤを用いて民の心をかたくなにしようとしておられるのは、民に対する「神の怒り」があるからである。すなわち、人が自らをかたくなにするのは「神の怒り」が人の内で働いているからである³⁸。そしてさらに、国土の破壊と民の捕囚が宣告されている。これも「神の怒り」のゆえであることは

²⁹ August Dillmann, *Der Prorhet Jesaja* (Leipzig: Verlag von S. Hirzel, 1898), 57.

³⁰ Nobuyoshi Kiuchi, *Leviticus* (AOTC; Nottingham: Apollos, 2007), 349.

³¹ *Ibid.*, 362.

³² *Ibid.*, 364.

³³ 「汚れている」(**טָמֵא**) という語が単なる祭儀的な意味ではないことについては、*Ibid.*, 37-40 を参照。

³⁴ 5 章 8-25 節や 9 章 7 節-10 章 4 節について後述するように、聖なる神を侮る民には高慢の悪がある。高慢は自己中心性の表れであり、「聖」（自己中心性のないこと）と対立する。

³⁵ オズワルトは炭火が全焼のいけにえの祭壇から取られた可能性と香の祭壇から取られた可能性の両方があることを述べている。しかし、罪の贖いによりふさわしいのは全焼のいけにえの祭壇であろう。Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 184.

³⁶ Nobuyoshi Kiuchi, "Propitiation in the Sacrificial Ritual," *Christ and the World* 15 (2005), 35-60; *idem*, *Leviticus*, 57. さらに、Dirk Büchner, "Εξιλιάσασθαι: Appeasing God in the Septuagint Pentateuch," *JBL* 129, no. 2 (2010): 237-260 を参照。

³⁷ Motyer, *Isaiah*, 78.

³⁸ Keil and Delitzsch, *Isaiah*, 201. ただし、神が人をかたくなにする場合でも、人の責任は同時に平行している。出エジプト記においては、神がパロの心をかたくなにするという表現（出エジプト 4:21、7:3、9:12、10:20、27、11:10、14:4、8）と、パロが自分の心を強情にするという表現（出エジプト 8:11 新改訳 8:15、8:28 新改訳 8:32、9:7、34）の両方がある。

明白である。「町々は荒れ果てて、住む者がなく、家々も人がいなくなり、土地も滅んで荒れ果て、【主】が人を遠くに移し、国の中に捨てられた所がふえるまで。そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や樅の木が切り倒されるときのように」（イザヤ 6:11-13）と言われている。「神の怒り」が告げられている 5 章 8-25 節において、国土の破壊（イザヤ 5:9）と民の捕囚（イザヤ 5:13）が宣告されていることから考えても、それと同じ結果を告げる 6 章において「神の怒り」が前提とされているのは明らかである。そして、6 章 11-13 節における「神の怒り」に基づくエルサレムとユダ王国に対する歴史的審判についての言及が、少なくとも、イザヤ書の前半（1-39 章）全体に及ぶことが明らかである。

イザヤ書 6 章における神の「聖」は、イザヤに「神の怒り」を伝えて自らの汚れを自覚させる働きをする。そして、さらに祭壇の炭火によって「神の怒り」を宥めてイザヤの罪を贖う働きをする。罪を贖われたイザヤは民に「神の怒り」を伝える使命を与えられる。このように見ると、イザヤ書 6 章には「神の怒り」を直接に表す用語は用いられていないが、そのテキストの中に「神の怒り」が前提とされていることがわかる。

4. イザヤ書 5 章 8-25 節における「神の怒り」³⁹

それでは、イザヤは実際どのように「神の怒り」を民に伝えたのであろうか。5 章 8-25 節は、5 章 1-7 節のぶどう畑のたとえで「酸いぶどう」（5:4）であると言われた神の民が、具体的にどのような状況であるかを明らかにする箇所であり、その中で「神の怒り」が明らかにされている。

以下、「神の怒り」について、原因（何が「神の怒り」を引き起こしたか）、道具（神が何を用いて怒りを示されるか）、様相（「神の怒り」はどのような様相を呈するか）、神の「聖」との関係（「神の怒り」が神の「聖」とどのように関係しているか）の四つの視点から考察する。

³⁹ 8-25 節を一つのペリコーペとして扱うものとして、以下の注解書を参照せよ。
Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 155-167; Watts, *Isaiah 1-33*, 87-95.

(1) 「神の怒り」の原因

このペリコーペでは、結びの 25 節において「【主】の怒りが、その民に向かって燃え」と「神の怒り」が告知されている。そして、25 節の冒頭には、前に述べられたことを理由として以下のことが起こることを表す「このゆえに」(עַל־כֵּן) という表現が用いられている。したがって、「神の怒り」の原因として、直前の 24 節の「彼らが万軍の主の律法を拒み、イスラエルの聖なる方の言葉を侮った」（私訳）ことが挙げられねばならない。この箇所の「律法」(תּוֹרָה) については、より一般的に「教え」と訳して、出エジプト記、レビ記、申命記などの「律法」ではなく預言者の言葉や祭司による教えと解釈する立場もある⁴⁰。確かに、イザヤ書における תּוֹרָה は機械的に「律法」と訳すのではなく文脈に応じて判断されるべきであろうが、預言者が民の悪を告発する文脈では「律法」と訳すのがふさわしいであろう⁴¹。イザヤに一定の影響を与えたと推定される前 8 世紀の預言者アモスも民の悪を告発するときに「主の律法」(תּוֹרַת יְהוָה) という表現を用いている（アモス 2:4、私訳）⁴²。

すでにイザヤ書 1 章において、民の悪とは主なる神に対する背きであることが明らかにされていた（イザヤ 1:2-6）。そして、背きの根底にあるのが「イスラエルの聖なる方」を侮ることであった（イザヤ 1:4）。24 節の「彼らが万軍の主の律法を拒み、イスラエルの聖なる方の言葉を侮った」という表現は、イザヤ書全体の序である 1 章と具体的な悪を告発する 5 章 8-25 節を巧みに結びつけている。すなわち、「イスラエルの聖なる方」を侮る民の悪は、具体的には主の律法を拒み神の言葉を侮ることとして現れたというのである。それでは、民はどのような仕方主の律法を拒み神の言葉を侮ったのであろうか。イ

⁴⁰ たとえば、新改訳（第三版）は「みおしえ」、新共同訳は「教え」、NRSV と REB は “the instruction” と訳す。しかし、口語訳と岩波訳は「律法」、KJV、NIV(2011)、ESV は “the law” と訳す。

⁴¹ 預言者が主なる神と民との契約に基づいて預言したことについては、David L. Petersen, *The Prophetic Literature: An Introduction* (Louisville: Westminster John Knox, 2002), 547-553, Kindle; idem, “Prophet, Prophecy,” in *NIDB*, 4: 647 を参照。

⁴² アモス書 2 章 4 節を新改訳（第三版）は「おしえ」、新共同訳は「教え」と訳すが、「おきて」(חֻק) という言葉が平行することから考えても「律法」と訳すことが適切であろう。この箇所については、KJV、NIV(2011)、ESV だけでなく NRSV と REB も “the law” と訳している。

ザヤは六つの「ああ」(אָה)で始まる託宣によって、民の悪を告発している⁴³。民の悪は次のようなものである。

第一に、「イスラエルの聖なる方」を侮ったことから生じた、自らを誇る高慢である。律法で禁じられたことを平気で行うのは、神に対する恐れがないからである。イスラエルの民は主なる神を恐れることを命じられていた(申命 5:29、6:2、13、24、8:6、10:20、13:4、17:19)。ところが、豊かな者たちは自分の知恵によって繁栄を保つことができると思っている。預言者は「ああ。自分で自分を知恵ある者とし、自分で自分を賢い者とする者たち」(21 節、私訳)と嘆く。豊かな者たちは、神がいかに自分を見ておられるかということを考えないで、自分で自分を見て知恵のある者と思いついでいるゆえに、神を恐れないのである。豊かな者たちは、神が彼らを裁いて滅ぼされることはないと思いついでいる。それゆえ、「彼のすることを早くさせ急がせよ。我らが見ることができるよう。イスラエルの聖なる方のはかりごとが近づくように。我らはそれを知るであろう」(19 節、私訳)とまで言うのである。神を侮る者たちがあえて神を「イスラエルの聖なる方」と呼ぶのは、神の審判を告げるイザヤを嘲笑する意図であろう⁴⁴。1 章 4 節において提示された「イスラエルの聖なる方」を侮るという民の悪が、民の傲慢な言葉を引用することによって、いっそう具体的に告発されているのがわかる。

預言者は、さらに諸々の悪を挙げている。すなわち、第二に、貪欲である。それは、「家に家を連れ、畑に畑を寄せている」(8 節) こととして告発されている。少数の豊かな者たちが家や土地を買い占め、貧しい者たちの住む余地を失わせ「自分たちだけが国の中に住もうとしている。」(8 節) イスラエルの民にとって嗣業の地の所有は主なる神から受けた聖なる権利であり、その権利を永久に譲渡することはできなかつた。このことは、列王記上 21 章のナボテのぶどう畑の物語やレビ記 25 章 23-33 節から明らかである。隣人のものをむさぼることは第十戒に対する違反である(出エジプト 20:17)。「家に家を連れ、

畑に畑を寄せている」というのは、エルサレムの都の豊かな者たちが、周辺の農村の貧しい者たちの家や畑を買い戻しの権利も認めずに永久に買い取り、家や畑を失った貧しい者たちが豊かな者たちの奴隷になっていたということであろう(ミカ 2:2 参照)⁴⁵。

第三に、偽りである。預言者は「ああ。うそを綱として咎を引き寄せ、車の手綱するように、罪を引き寄せている者たち」(18 節) と言って嘆いている。豊かな者たちはどのような偽りをしていたのだろうか。20 節の嘆きの言葉は、善悪の判断を正反対にしていたことを示している。「ああ。悪を善、善を悪と言っている者たち。彼らはやみを光、光をやみとし、苦みを甘み、甘みを苦みとしている。」(20 節) 貧しい者たちを虐げるという悪を善であるかのように宣言し、貪欲なやみの業を輝かしい光の業であるかのように誇り、多くの民が苦い思いをしていることを甘いことのように喜んでいる、倒錯した豊かな者たちの姿が明らかにされている。そして、そのような倒錯の原因として、賄賂があることを預言者は指摘する。すなわち、「彼らはわいろのために、悪者を正しいと宣言し、義人からその義を取り去っている」(23 節) のである。賄賂によって正しい裁きを曲げることは、律法で厳しく禁じられていることであるのに(出エジプト 23:8、申命 16:19)、豊かな者たちは富を増し加えるために賄賂を取っているのである。

第四に、深酒である。すなわち、「朝早くから強い酒を追い求め、夜をふかして、ぶどう酒をあおっている者たち」(11 節) とあるように、貧しい者たちを犠牲にして得た富で豊かな者たちが酒の快樂にふける悪である。彼らは酒の快樂にふけることにより「【主】のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。」(12 節) すなわち、彼らは酒と結びつくことによって主か

⁴⁵ ブレンキンソップは、大土地経営 (latihunndia) の形成を含む社会の変化が起こったと理解する。Joseph Blenkinsopp, *Isaiah 1-39* (AB; New York: Doubleday, 2000), 213. オズワルトも同旨。Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 156. ウィリアムソンは、奴隷労働による大土地経営が生じたのではなく、抵当によって土地の所有権を失った農民が収獲物の多くを新しい所有者に納めねばならない状態になったか、あるいは農民が土地の用益権を一時的に豊かな者に譲った状態ではなかったかと推定する。H. G. M. Williamson, *A Critical and Exegetical Commentary on Isaiah 1-27*, vol. 1 (ICC; London and New York: T & T Clark International, 2006), 351-352.

⁴³ 同じ「ああ」をイザヤは自分自身に対しても用いている(イザヤ 6:5)。この「ああ」は、葬式のときの嘆きや処罰を与えるときの嫌悪を表す言葉である。Waldemar Janzen, *Mourning Cry and Woe Oracle* (BZAW 125; Berlin: Walter de Gruyter, 1972), 1.

⁴⁴ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 164.

ら離れてしまっている。主の律法に反することをして得た富が酒の快樂の原因になっているだけではなく、酒の快樂がいつそ彼らを主から離れさせる原因になっているのである。エルサレムの豊かな者たちは深酒を耽むどころか、財力や権力の象徴としてむしろそれを誇りとしていたようである。預言者はさらに「ああ」という嘆きの言葉を加えて「ああ。酒を飲むことでの勇士、強い酒を混ぜ合わせることにかけての豪の者」(22節)と言う。深酒を誇りとする者たちへの強烈な皮肉である。豊かな者たちは神の民の一員でありながら、神の民としての正常な感覚を失って、神から目を背けて神の御業を見ようともせず歩んでいたのである⁴⁶。

預言者は、具体的な諸々の悪を告発することによって、民に「イスラエルの聖なる方」を侮る根本的な悪を自覚させようとしている。すなわち、主なる神は、預言者を通して、背いていながら自らの背きに気づかない民に「神の怒り」をもって背きの現実を示そうとしておられるのである。

(2) 「神の怒り」の道具

「わが民は無知のために捕らえ移される」(13節)という審判の預言は、外国による侵略とその結果としての民の捕囚を表している。この箇所は、イザヤ書において民の捕囚とその原因が語られる最初の箇所である⁴⁷。「捕らえ移される」(גלה)という言葉は、民が捕囚として外国に移されることを表す預言においてしばしば用いられる(アモス 1:5、5:5、27、6:7、7:11、17、エレミヤ 13:19、20:4、22:12、27:20)。北王国イスラエルに語られた「わたしはあなたがたを、ダマスコのかなたへ捕らえ移す」(アモス 5:27)という預言においては、アッシリアが神の道具であり、同じ動詞のヒフィル形を用いてユダ王国に告げられた「彼は彼らをバビロンへ引いて行き、剣で打ち殺す」(エレミヤ 20:4)という預言においては、バビロンが神の道具である。しかし、イザヤ書 5章 13節の「捕らえ移される」は、どこに捕らえ移されるかが語られていな

⁴⁶ 祭司が会見の天幕に入る場合(レビ 10:9)や、ナジル人の誓願を立てている場合(民数 6:2-3)以外は、酒を飲むこと自体が律法で禁じられているわけではない。しかし、イスラエルの知恵は、深酒が正常な感覚を失わせることをよく知っている。箴言 20:1、21:17、23:20-21、29:35、31:4-5を参照。

⁴⁷ Watts, *Isaiah 1-33*, 92.

いので、神の道具が具体的にどの国であるかが明らかでない。「神の怒り」の道具は、異邦人の国であろうということは推定されるのであるが、どの国と特定されてはいない。イザヤはアッシリアだけではなく、アッシリアの後に起こるさらに強大な国をも神の道具として考えていたのではないだろうか。イザヤ書 39章 6-7節のヒゼキヤ王に対する預言から考えても、イザヤがバビロンをも視野に入れていたと考えることは可能であろう。

25節の「このゆえに、【主】の怒りが、その民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打った。山々は震え、彼らのしかばねは、ちまたで、あくたのようになった。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている」という預言も、外国の侵略による破壊と殺戮、そして将来の王国の滅亡と民の捕囚という文脈で理解することができる。すなわち、主なる神はアッシリアを用いてイスラエルとユダの民を打たれて、民の死体が散乱するような悲惨な状況となった。しかし、「神の怒り」による裁きはそれで終わったのではなく、将来にはさらに強力な外国を用いてより厳しい審判を行われるであろうということである。「山々は震え」は神の顕現を表す象徴的表現と理解することができる⁴⁸。これを文字どおりの意味にとって、イザヤが預言者として召される前にウジヤ王の治世において起こった地震の可能性を主張する研究者もあるが⁴⁹、25節の直前の24節や、25節に続く26-30節が外国による侵略を意味していると考えられるので、25節も外国による侵略を意味していると考えべきであろう。「それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている」という言葉は、北王国に対する審判の文脈においても繰り返し用いられている⁵⁰。この言葉は、神の審判を受けながらも悔い改めない民に対して、神はさらに厳しい審判を行うことを表している。悔い改めない民に対して「神の怒り」は持続するもので、それはイスラエルやユダに対するたび重なる外国の侵略によって表されるのである。

⁴⁸ 詩 18:7 (8)、ナホム 1:5 参照。

⁴⁹ たとえば、Williamson, *Isaiah 1-27*, vol. 1, 404.

⁵⁰ 後述の9章7節-10章4節における「神の怒り」を参照。

(3) 「神の怒り」の様相

「神の怒り」の様相は「火の舌が刈り株を焼き尽くし、炎が枯れ草をなめ尽くすように」(24 節)という直喩で説明されている。この直喩の表す中心点は、圧倒的な神の力による民の速やかな滅亡であろう。後述の 9 章 17-18 節(新改訳 18-19 節)にも見られるように、ひとたび神が怒りを表されると民は速やかに滅びる。ところが、24 節の「火の舌が刈り株を焼き尽くし、炎が枯れ草をなめ尽くすように」に続く「彼らの根は腐れ、その花も、ちりのように舞い上がる」という比喩は、次第に植物が枯れていくというようなやや異なった印象を与える。花が舞い上がるという比喩は繁栄が速やかに終わるさまを表しているであろうが、根が腐るという比喩は時間をかけて繁栄の基盤が崩壊していくことを連想させるからである。「なめ尽くす火」と「腐る根」と「舞い上がる花」の取り合わせは一見奇妙に見えるが、「神の怒り」の現実性をさまざまな見方で表現していると言えるであろう。すなわち、「神の怒り」のもとでは、それが全面的に表される前においても、豊かな者の繁栄の基盤が「腐る根」のように次第に崩壊していき、ひとたび「神の怒り」が全面的に表されたならば、「舞い上がる花」のように繁栄は終わり、「なめ尽くす火」によって焼かれる「刈り株」や「枯れ草」のように神に逆らう民は滅亡するというのである。すなわち、1 章 4 節において提示された「イスラエルの聖なる方」を侮るといふ民の悪がどのような神の審判を招くかということが、印象的な直喩や比喩によって表現されているのである。

(4) 神の「聖」と「神の怒り」の関係

5 章 8-25 節においては、「神の怒り」による審判が「聖なる神は義によって御自身を聖なる方として示される」(16 節、私訳)という言葉によって説明されている。したがって、「神の怒り」とは、神が義によって御自身の「聖」という存在の本質を表現されることであると言うことができる。この神の「聖」の表現は、オットーが言うような非合理的なものであろうか⁵¹。前述した「神の怒り」の原因に基づいて考えるならば、民の中の豊かな者たちが「イスラエ

⁵¹ オットー、前掲書、38 頁

ルの聖なる方」の言葉を侮り(24 節)、イスラエルに与えられた律法に反することをしているゆえに、聖なる神は義なる律法に基づいた審判によって御自身の「聖」を示されるのである。聖なる神と民の間には契約に基づいた人格的な関係があり、民は何が義であるかを律法によって知ることができる。それゆえ、侮る者たちに対して聖なる神が御自身の「聖」を表現して怒られることは、予測可能であるゆえに非合理的ではない。むしろ、律法によって示された神の意思に反することをなす者に対して「神の怒り」が生じることは、合理的なことであると言える。その意味においては、ヘッシェルが神の熱情を神理解の中心に置き、熱情は非合理的なものではなく預言者が情緒的かつ道義的に理解しうるものであると主張したことは正しい⁵²。しかし、この箇所における預言者の神理解の中心は、熱情よりもむしろ「聖」であることに注意しなければならない。「神の怒り」とは、「イスラエルの聖なる方」が民に理解可能な仕方御自身の「聖」を示そうとされることである、と預言者は述べているのである。

(5) まとめ

1 章 4 節にある「イスラエルの聖なる方」を侮る民の悪は、5 章 24 節にあるように、「万軍の主の律法を拒み、イスラエルの聖なる方の言葉を侮った」こととして現れる。「神の怒り」の原因となったそれらのことをより具体的に述べれば、第一に、「イスラエルの聖なる方」を侮ったことから生じた、自らを誇る高慢である(5:19、21)。第二に、貪欲である(5:8)。第三に、偽りである(5:18、20、23)。第四に、深酒である(5:11、22)。預言者は、具体的な諸々の悪を告発することによって、民に「イスラエルの聖なる方」を侮る根本的な悪を自覚させようとしておられる。「神の怒り」の道具は異邦人の国である。「わが民は無知のために捕らえ移される」(5:13)という審判の預言は、外国による侵略とその結果としての民の捕囚を表している。「神の怒り」の様相は、5 章 24 節の火の直喩や植物の比喩で説明されている。神の「聖」と「神の怒り」の関係としては、「聖なる神は義によって御自身を聖なる方として示される」(16 節)とあるように、「神の怒り」が神の「聖」の表現であること

⁵² ヘッシェル、前掲書、21 頁

が明らかにされている。民は神の意思を義なる律法によって知ることができるゆえに、神を侮って神の意思に反したならばどのような結果を招くかは、予測可能なことであり、非合理的ではない。

「神の怒り」を表す火の直喩や植物の比喩は、一見すると「神の怒り」を「隠された自然力」のようなものとするオットーの主張を支持するかのように見える。しかし、「神の怒り」の原因である民の悪はきわめて具体的に述べられているのであるから、「神の怒り」は理解可能なものである。また、「神の怒り」の道具は神の民を侵略する外国という歴史上の力であり、「隠された自然力」ではない。主なる神は御自身の「聖」の働きとして、理解可能な原因に基づき、歴史上の力によって、「神の怒り」を発して神の民を裁かれるのである。

5. イザヤ書9章7節-10章4節における「神の怒り」

イザヤ書9章7節（新改訳9章8節）-10章4節は北王国とユダ王国に対して告げられた審判の預言である。この預言は四つの段落（ストローフィ）から成り、それぞれの段落が「それでも、御怒りは去らず、なおも御手は伸ばされている」というリフレインで終わっている。このリフレインの句はイザヤ書5章25節にもあり、5章8-25節の文脈では、それまでに語られたユダ王国への「神の怒り」が弱まるどころかさらに強くなることを告げている。9章7節（新改訳9章8節）-10章4節の文脈では、第一段落から第三段落において北王国に対する神の審判がなされるがそれによっても「神の怒り」は収まらず、第四段落においてユダ王国に対する審判がなされることが示唆されている⁵³。

(1) 「神の怒り」の原因

第一の段落（7-11節、新改訳8-12節）においては、民の高慢が「神の怒り」の原因である。自らを誇る高慢が「神の怒り」を招くことは、5章8-25節についてすでに述べたとおりである。この箇所では預言者は民の高慢を次のように告発する。「この民、エフライムとサマリヤに住む者たちはみな、それを知

⁵³ Childs, *Isaiah*, 85. オズワルトは第四段落（10:1-4）において北王国とユダ王国の両者への審判が告げられていると考える。Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 259.

り、高ぶり、思い上がって言う。れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」（8-9節、新改訳9-10節）「れんがが落ちた」と「いちじく桑の木が切り倒された」は、アッシリアによる都市や国土の破壊を表しているのであろう⁵⁴。北王国の民は、アッシリアによって都市や国土が破壊されても、それらの破壊を神の審判として謙遜に受け止めようとはしない。むしろ、自分たちの力によって前よりも優れたものをもって都市や国土を再建することができると考えている。「切り石で建て直そう」「杉の木でこれに代えよう」は、国の滅亡の時が近づいているにもかかわらずなおも自らの力に自信をもっている北王国の民の高慢を表しているのである。第二の段落（12-16節、新改訳13-17節）においても、民が高慢なままへりくだらず主なる神に立ち帰らなかったことが「神の怒り」の原因とされている。「しかし、この民は、自分を打った方に帰らず、万軍の【主】を求めなかった。」（12節、新改訳13節）

高慢が貪欲を伴うことは、5章8-25節についてすでに述べたとおりである。第四の段落（10章1-4節）においては、国の指導者が自らの貪欲のゆえに弱者を虐げていることが告発されており、それが「神の怒り」の原因である。「ああ、不義のおきてを制定する者、わざわいの判決を書いている者たち。彼らは、弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者の権利を奪い、やもめを自分の餌食にし、みなしごたちを略奪している。」（1-2節、私訳）この箇所でもユダ王国が名指しされているわけではないが、9章20節（新改訳21節）の「マナセはエフライムを、エフライムはマナセを、そして彼らは共にユダを」（私訳）という言葉は、神の審判がユダ王国に及ぶことを示している。それゆえ、それに続く10章1-4節もユダ王国に対する審判を示唆していると考えられる⁵⁵。もちろん、北王国の指導者たちも、神の律法を軽んじて、民のうちの弱く貧しい者をしいたげていたのである（アモス2:6）。

⁵⁴ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 252-253. モティアーは地震のことを述べている可能性と破壊されても再建するという比喩である可能性の両方を肯定する。Motyer, *Isaiah*, 107.

⁵⁵ Childs, *Isaiah*, 86.

(2) 「神の怒り」の道具

第一の段落(7-11節、新改訳8-12節)においては、諸国が北王国に敵対するありさまが具体的に言及されている。「そこで【主】は、レツインに仇する者たちをのし上らせ、その敵たちをあおりたてる。東からはアラムが、西からはペリシテ人が、イスラエルをほおぼって食らう。」(10-11節、新改訳11-12節)レツインは北王国と同盟関係にあったアラム王国の王であり、両国は反アッシリア同盟を結んでいた。したがって、「レツインに仇する者たち」はアッシリアを指すのであろう⁵⁶。また、第四の段落(10章1-4節)においても、「捕らわれ人として跪き、殺された者たちとして倒れる」(4節、私訳)という表現は、北王国を侵略する外国が「神の怒り」の道具であることを表している。

ところが、第二の段落(12-16節、新改訳13-17節)においては、不正な指導者や偽りの預言者の惑わしによって民が滅びへと向かうことが述べられているので⁵⁷、民の中の不正な指導者や偽りの預言者そのものが「神の怒り」の道具である。「そこで、【主】はイスラエルから、かしらも尾も、なつめやしの葉も葦も、ただ一日で切り取られた。そのかしらとは、長老や身分の高い者。その尾とは、偽りを教える預言者」(13-14節、新改訳14-15節)という審判の預言からすると、長老や身分の高い者や預言者だけが滅ぼされるということのようにも思える。しかし、続く15節(新改訳16節)は「この民の指導者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる」とあるので、長老や身分の高い者や預言者だけが滅ぼされるということではなく、彼らの誤った導きにより長老や身分の高い者を含む民全体が惑わされて滅びへと向かうということであろう。

さらに、第三の段落(17-20節、新改訳18-21節)においては、民が互いを食べ物にすることによって滅びていくありさまが述べられており、民自身が互いに「神の怒り」の道具になっているのがわかる。すなわち、「右にかぶりついても、飢え、左に食いついても、満ち足りず、おのおの自分の腕の肉を食べ

る。」(19節、新改訳20節)という比喻で民の自己破滅が表されている。これは、民が自分の同胞を食べ物にしても満足せず、あげくの果てに自分自身を食べ物にして破滅するということである。北王国においてヤロブアム二世の死から北王国滅亡までの間に繰り返した、流血による王位の交代を意味しているのかもしれない(列王下15:8-31)⁵⁸。

(3) 「神の怒り」の様相

9章7節-10章4節においても、5章8-25節と同じように「神の怒り」の様相は火の直喩や比喻で表現されている。ただし、この箇所での火の直喩や比喻は二通りの解釈の可能性があると思われる。第三の段落(17-20節、新改訳18-21節)の17節(新改訳18節)において、「悪は火のように燃えさかり、いばらとおどろをなめ尽くし」と告げられている。「いばらとおどろ」は、指導者や民の「悪」(רָשָׁע)の結果生じたさまざまな社会的不正であろう(イザヤ5:6、33:12、ミカ7:4参照)。17節(新改訳18節)ではその「悪」が火のように燃えると述べられているが、18節(新改訳19節)においては「万軍の【主】の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火のえじきようになり」と語られている⁵⁹。この連続した箇所から何を読み取ることができるであろうか。一つの可能性は、17節(新改訳18節)の「悪」の火が18節(新改訳19節)の「神の怒り」の火そのものという解釈である。すなわち、17節(新改訳18節)の直喩が示しているように、「悪は内在的に自己破壊的なものであるが、それは神の意思によってそうなるということである⁶⁰。」この解釈によれば、「神の怒り」は民の「悪」が活動するままにまかせるということである⁶¹。言い換えれば、神の摂理的な御業によって民の心がかたくなにされるということである(イザヤ63:17参照)。もう一つの可能性は、17節(新改訳18節)の「悪」の火は16節(新改訳17節)の「みなを神を敬わず、悪を行い、すべて

⁵⁸ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 257. Motyer, *Isaiah*, 109-110. Blenkinsopp, *Isaiah 1-39*, 219.

⁵⁹ עֲבָרָהは、激しい破壊的な怒りを表す。Gale B. Struthers, “עֲבָרָה” in *NIDOTTE*, 3:316.

⁶⁰ Motyer, *Isaiah*, 109.

⁶¹ Keil and Delitzsch, *Isaiah*, 260-261.

⁵⁶ Oswalt, *Isaiah: Chapters 1-39*, 253. Motyer, *Isaiah*, 107.

⁵⁷ *Ibid.*, 108.